

73. アフリカ熱帯森林帯における民族間共生の変容とレジリエンス

竹内 潔

概要

報告者は1989年から2010年までコンゴ共和国北東部に居住する狩猟採集民アカ人と近隣農耕民の民族間関係について断続的に現地調査をおこない、両者が文化的に対立しつつも、擬制的な親子関係を結んでアカ人が労働力、農耕民が農作物を供給する経済的な相互依存関係を担保して共存していることを明らかにした。本研究では、この知見を踏まえて、20世紀前半の両者の関係を文献調査によって推測するとともに、現地調査によって関係の現況を明らかにした。

文献調査によって、20世紀初頭にはアカ人が獣肉や象牙などを農耕民に供給し、農耕民が農作物や鉄器などを返報するという経済的相互依存関係があり、植民地時代後期に農耕民が労役から解放されるとともに商業経済が浸透して、これまでの研究で見いだした重層的関係が成立したことが看取された。

現地調査によって、森林内の集落に居住するアカ人と農耕民の間には以前と同様の関係が維持されている一方で、商業伐採の浸透と交通網の整備によって広域的な経済圏が出現した急激な社会経済的变化によって、集団的紐帯が弱化したアカ人が農耕民の村落や道路沿いに移動し、農耕民や伐採労働者に対して従属的な立場におかれるという関係の多様化が生じていることが明らかとなった。今後は、地域のミクロな社会経済的調査をもとにアカ人と農耕民や外来者との共存的関係を再構築する方途を考究したい。

助成を賜ったことで、従来の固定的で静態的な民族決定論的研究に対して、歴史的動態の考究とミクロな多様性の視点の重要性を実証できたことに深謝したい。

背景および目的

人類はおよそ700万年前に、アフリカの熱帯森林が後退する環境変動の過程で誕生し、乾燥化が進んで拡大する草原地帯において進化を遂げた。現生人類（ホモ・サピエンス）は約30万年前にアフリカの草原帯で誕生したと考えられているが、7万年前ごろから地球上のさまざまな環境に進出を開始した。現在、アフリカのコンゴ盆地の熱帯森林帯に散在している狩猟採集民集団および狩猟採集を生業としていた集団（**図1**）は、ゲノム分析によると、この拡散と時を同じくして熱帯森林に進出をはじめた集団の子孫だと推測されている（Batini et al., 2011）。アフリカ熱帯森林の狩猟採集民は、短軀という身体的特徴をもつために俗に「ピグミー」と呼ばれているが、低身長は高温多湿に対する体熱放散の効率化、密生した下生えでの移動、タンパク質不足への対応など、熱帯森林環境への適応の結果だと考えられている。

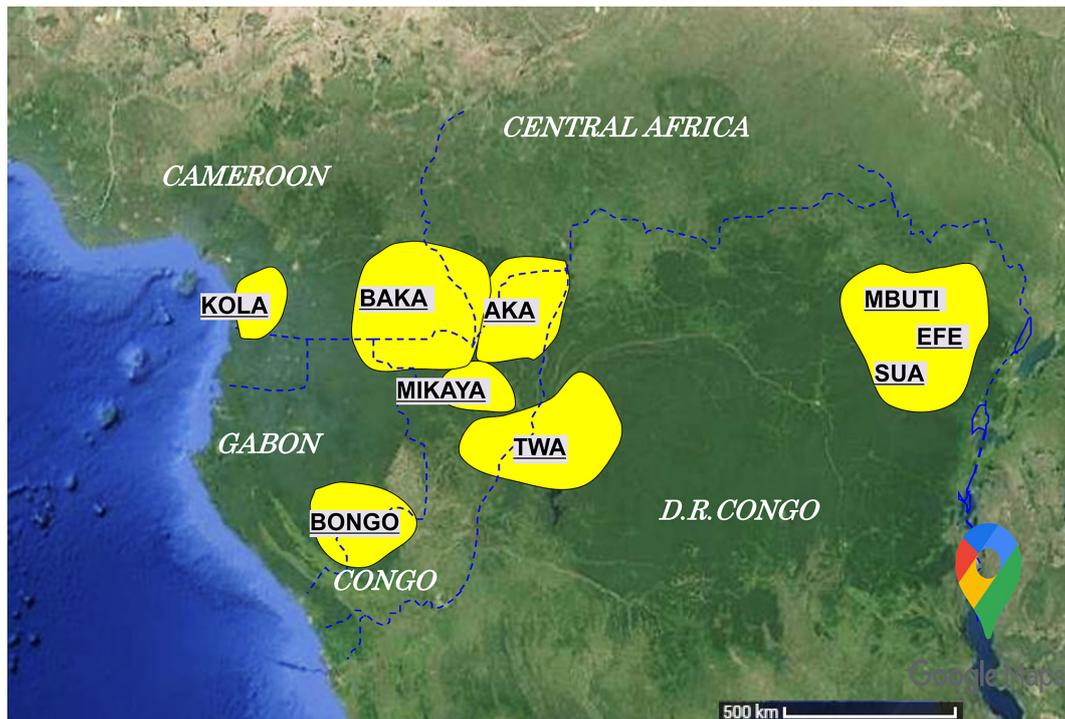


図 1. コンゴ盆地の熱帯森林帯（濃い緑）に散在する（ポスト）狩猟採集民集団。

西アフリカで農耕が始まったおよそ 4000 年前から農耕集団が熱帯森林帯に進出を始め、生産性の高い食用バナナが東南アジアから伝播した 2500 年前以降、農耕民は熱帯森林帯全域に拡散した。熱帯森林に進出してきた農耕民と先住者である狩猟採集民の関係がどのようなものであったのかについては、熱帯森林では生活遺物が腐食しやすいうえに信頼できる歴史的な文字資料も皆無であるので、ほとんど何も分かっていない。ただし、現在の狩猟採集民の民族集団が例外なく独自の言語を喪失して近隣に居住する農耕民集団もしくはかつて近接して居住していた農耕民集団の言語を借用していることから、熱帯森林帯の各地で狩猟採集民は長期にわたって農耕民と密接な交流を続けてきたと推測される (Takeuchi, 2014)。また、多くの地域で狩猟採集民は農耕民に対して社会的に劣位であるが、このような格差の起源については、18 世紀後半から 19 世紀にかけて農耕民が鉄生産を活発化させて、狩猟具として鉄器を狩猟採集民に供給しはじめたことが契機と考える研究者もいる (K. Lupo, Ndanga, & Kiahtipes, 2014; K. D. Lupo et al., 2015)。

報告者は、1989 年から 2010 年まで、コンゴ盆地の熱帯森林帯の西部、コンゴ共和国北東部に居住する狩猟採集民アカ人の調査を断続的にこなしたが、近隣の農耕民の関係については、次の点が明らかとなった。すなわち、アカ人と近隣農耕民は、お互いに動物だと蔑視しあう文化的対立の関係にあるが、経済的にはアカ人が労働力を提供し、農耕民が農作物を供与する相互依存の関係にある。このようなアンビバレントな民族間関係は、アカ人の大家族が「コ」、農耕民のクランが「オヤ」となって、農耕民がアカ人の奉仕に対して扶養するという父権的な農耕民社会のイデオロギーを適用した擬制的親子関係を両者がとりむすんでいることに由来する。つまり、アカ人と農耕民の民族間関係を基礎づける擬制的親子の仕組みは、平等主義的なイデオロギーを持つアカ人にとっては全面的に受け入れられるものではないために農耕民の課役に従わないことも多く、結果として両者の間にイデオロギー的な対立が潜在するが、他方でこの仕組みによって両者の経済的相互依存が成立している (竹内, 2001)。こうして、対立を内包しながらも、民族間の決定的な対立を回避する共生関係が成立していたのが、1989 年から 2010 年までの調査地の状況であった。

本研究では、これまでの研究成果を踏まえながら、調査をおこなった期間の前後のアカ人と農耕民の民族間関係の様態を明らかにするとともに、関係の変化の要因を考察することを目的とした。具体的には、まず、古文書や調査報告などの文献をもとに 20 世紀前半のフランス植民地時代のアカ人と農耕民の民族間関係について解明することを試みた。過去の調査において、アカ人や農耕民の老人に植民地時代の事情の聞き取りをおこなった

が、かれらの歴史認識は編年的に整理されるものではなく、時系列にとらわれずに個人的主観に沿って語られる物語であるので、時間的変遷を追うのが困難であった。そのために、今回の研究では植民地時代にフランス人が残した文字資料をもとに過去の民族間関係を推測するという手段をとった。次に、2010年以降の調査地域の社会経済的変化をふまえて民族間関係の現況を明らかにするために、調査をおこなってきた地域において現地調査を実施した。

方法

以下の二つの方法によって、研究を実施した。

- 1) 20世紀前半のアフリカ熱帯森林への旅行記などを蒐集するとともに、フランスの人類博物館においてこの時代のコンゴ共和国北部の地誌的な調査報告類、コンゴ共和国の国立記録保管館において植民地行政資料をそれぞれ収集し、これらの資料をもとに植民地時代のアカ人と農耕民の民族間関係を推測した。
- 2) 2010年まで断続的に現地調査をおこなったコンゴ共和国北東部リクアラ (Likouala) 州のA村及びその周辺地域 (図2) において、2024年3月30日から4月8日の10日間、地域の社会経済的変化とアカ人と農耕民の民族間関係の変化について調査を実施した。なお、当初の計画では報告者が最後に調査をおこなった2010年の移動用車両の借料などをもとに30日間の現地調査をおこなう予定であったが、2010年当時と交通事情が大きく変わっており、調査期間を大幅に縮減せざるをえなかった。交通事情の変化については、次項で詳細を示す。

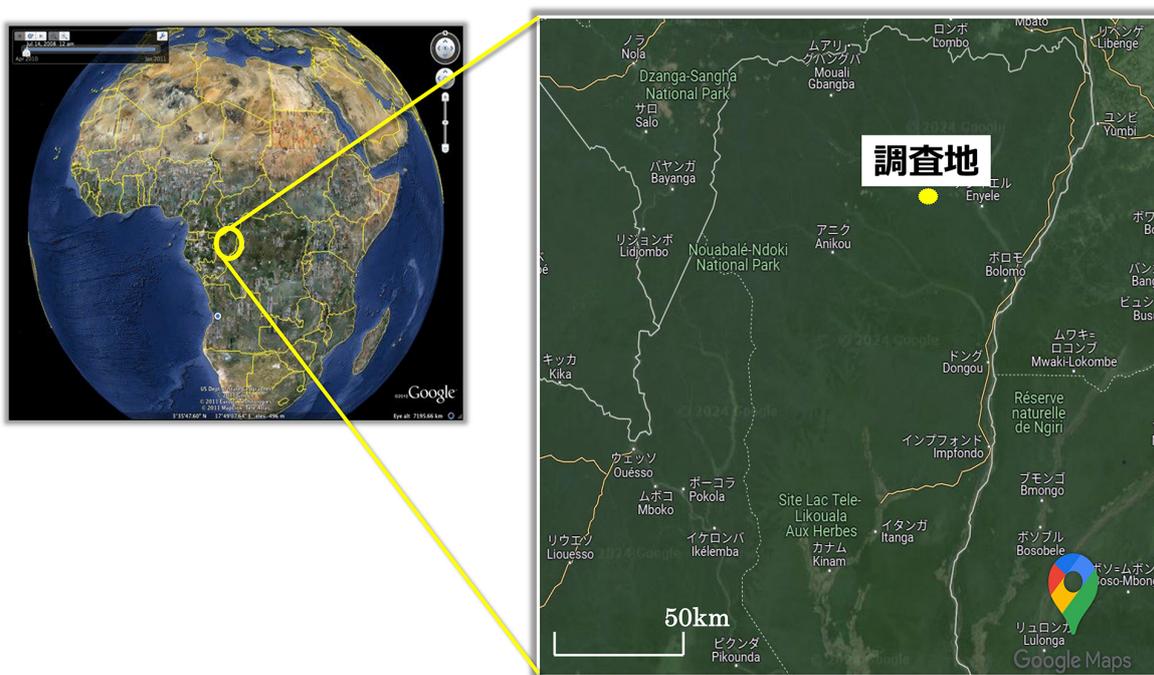


図2. 調査地の位置.

結果および考察

【20世紀前半の植民地時代のアカ人と近隣農耕民の関係】

フランス植民地行政府は、19世紀末から20世紀初頭にかけて人頭税や労働力の徴収など植民地運営のために熱帯森林内に散在して集落をつくっていた農耕民を川沿いに定住化させたが、アカ人については行政的措置をとらなかった。植民地行政府は農耕民に強制的にゴム採取に従事させるとともに象牙(1900~1910年)や羚羊類の

毛皮（1910～1940年）の供出を義務づけた。農耕民はアカ人に食糧用の獣肉と供出用の象牙と毛皮の獲得のための狩猟を委託し、アカ人はこれらの見返りに農作物、鉄器、服などを農耕民から受けとった。

20世紀初頭に調査をおこなった人類学者によれば、アカ人は特定の農耕民と家族もしくは集落ごとにパトロン-クライアント関係を結んでおり、アカ人は社会的に劣位ではあるが、不満があれば別の農耕民のところに移動する自由度を保っていた(Bruel, 1910; Regnault, 1911)。アカ人と農耕民の間の擬制的親族関係についての報告はないが、アカ人が農耕民に供与するものが労働力ではなくゾウや羚羊という点を除けば、報告者が1989年から2010年まで観察したのとはほぼ同一の関係性がすでに20世紀初頭に成立していたことが推測される。

1940年代に調査をおこなった人類学者の調査報告では、農耕民集団とアカの集団の間にパトロン-クライアント関係があることやアカ人が以前より農耕民への依存を強めて農耕民集落の周囲に居住していることが記述されている(Lalouel, 1949)。この報告には「依存」の原因については記述されていないが、植民地行政資料などをもとにして、二つの要因が考えられる。第一に、1940年代以降、ゴム採取などの強制労働と羚羊類の毛皮の供出が停止されて、農耕民が食糧用の獣肉を得るための狩猟に時間を割けるようになり、農耕民の生活における狩猟専従者としてのアカ人の役割の比重が低下したこと。第二に、同じく1940年代以降に、農耕民が食用油をとるために栽培しているアブラヤシの種子を石鹼や香料の材料として買い取る商取引が広範囲におこなわれるようになり、また、行商人が鍋、山刀、服などの工業製品を売るために農耕民の集落を訪れるようになった(Demesse, 1958)。こうして、森林に居住するアカ人の生活にとって農工業製品の供給者としての農耕民の比重が高くなったこと。この二つの要因によって、経済的関係においてアカ人は農耕民に対して劣位になり、農耕民のクランとアカ人の拡大家族との間に擬制的な親子関係が結ばれて、アカ人が労働力を提供し、農耕民が農作物と工業製品を返報するという、報告者が観察した社会経済的関係が成立したと推測される。

本研究の調査地から北方に70キロメートル離れた中央アフリカ共和国ロバイ地方で調査をおこなったBahuchetとGuillaumeは、1960年代に農耕民が換金作物としてコーヒーの栽培を始めたことが契機となって、アカ人が農耕民に労働力を提供する関係が成立したと述べている(Bahuchet & Guillaume, 1982)。しかし、調査地ではコーヒー栽培をおこなっていた農耕民は数世帯だけであり、コーヒー栽培がアカ人と農耕民の関係の転機になったとは考えられない。コンゴ盆地の狩猟採集民と農耕民の関係は、同じ狩猟採集民の民族集団であっても地域の社会経済環境によって多様であり、民族カテゴリーで決定づけられるものではない(Takeuchi, 2014)。本研究によって、このことが歴史的変遷についても同様であることが明らかとなった。

なお、植民地期以前のアカ人と農耕民の関係の解明は今後の課題であるが、15世紀から16世紀にかけて現在のコンゴ共和国で交易活動をおこなったポルトガル人商人や18世紀以降中央アフリカ内陸部で奴隷交易をおこなったオランダ人商人に関する古文書の精査が解明の手がかりになるかもしれない。

【調査地域の社会経済的環境の実状】

2006年に調査地の東方40キロメートルに位置する小都市エニエレ(Enyelle)に基地を置く商業伐採会社が調査地周辺で部分的な伐採を開始したが、2010年の調査時には操業が終わっており、エニエレに木材を搬出するための道路は整備が放棄されて、伐採期間中頻繁であった行商人の往来も見られなかった。

現在では調査地周辺地域のほぼ全体で操業がおこなわれており、木材搬出路が隣国との国境を越えて広範囲に整備され、地域の幹線道路の役割も果たしている(図3)。

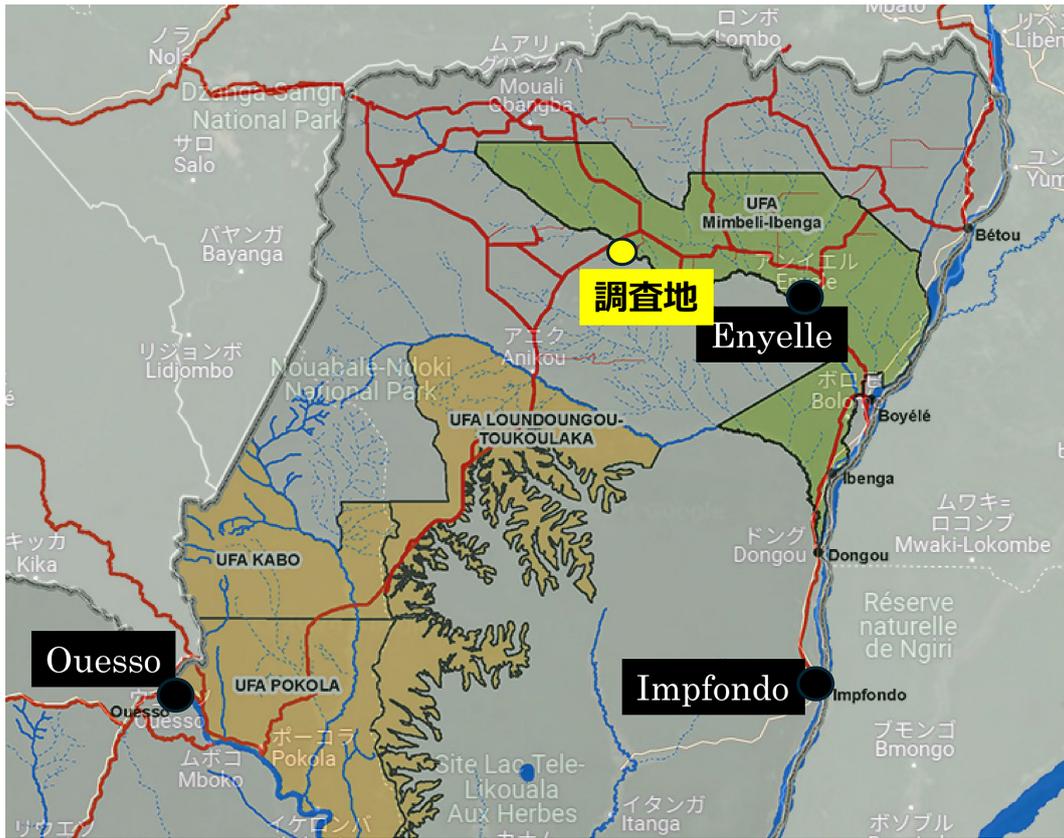


図3. コンゴ共和国北東部の木材搬出路のネットワーク (赤線) .

Situation des UFA et UFE, Congolaise Industrielle des Bois をもとに作成

また、2010年までは、コンゴ共和国の首都ブラザビル (Brazzaville) と調査地との交通は、コンゴ北西部リクアラ (Likouala) 州の州都インフォンド (Impfondo) まで空路または河川路での移動、インフォンドからエニエレを経由して自動車または船外機付きカヌーという交通手段でつながっていたが、現在ではブラザビルから北西部サンガ (Sangha) 州の州都ウェッソ (Ouessou) 市を経由して車両での直接移動が可能となり、一方、インフォンドは南方に広大な湿地帯があるため、ブラザビルとの間に道路は建設されておらず、ブラザビルとは陸路でむすばれていない。そのため、コンゴ北西部 (図3) の流通の中心はウェッソに移り、インフォンドとエニエレの間の道路は整備されずに難路となり、大型トラックしか移動できない状況となっている。一方、ウェッソはコンゴ北部と首都、隣国中央アフリカ共和国とカメルーンとコンゴの間の物流のハブとなり、2012年に人口が2万4千人であったのが、現在は11万以上の人口を擁するコンゴ共和国北部の中核都市に成長した。このような交通と流通の変化の中で、現在の調査地はウェッソの商業圏の一部となっており、かつてのようにブラザビルからインフォンド経由でのアクセスは困難となり、ウェッソ経由での通交が通常である。

以上のとおり、商業伐採の浸透とそれに随伴する交通網の建設によって広い商業圏が成立しているというのが、現在の調査地が置かれている社会経済的環境である。

なお、本研究では当初、2010年までと同様、ブラザビルからインフォンド経由でエニエレに行き、そこで調査地までの移動に要する数時間の往復のためだけに四輪駆動車を借りる予定だった。しかし、実際は、ウェッソから2日行程で調査地に移動するしか交通手段がなくなっており、調査期間全日の四輪駆動車の借り上げと運転手の雇用が必要となった。さらに、物流と人流の急激な増加のためにウェッソ市では四輪駆動車の借料と運転手の謝金が2010年当時と比べると約2.5倍と高騰しており、当初予定していた30日間の現地調査を10日間に短縮せざるをえなかった。

【調査地域におけるアカ人と農耕民の民族間関係の現況】

調査期間中の観察と聞き込みとをともにすると、農耕民が居住する A 村とその周辺地域に居住するアカ人との関係は、アカ人の居住形態によって大きく 3 つのタイプに分けることができる。

1) 森林内の定住化集落に居住するアカ人と農耕民の関係

A 村の南方約 10 キロメートルの一次林の中には、2010 年までの調査対象であったのと同じアカ人の集落が存続している。この集落の周辺でも伐採がおこなわれたが、現在ではかなり植生が一次林に近い状態に戻っており、この集落のアカ人はかつてと同じように狩猟網を使って羚羊類を捕獲し、ヤムイモなどの野生植物食糧を採取する一方で、A 村で、農耕民に対して畑の伐開や除草などの農作業に労働力を提供し、かわりにキャッサバやプランテンバナナなどの農作物、ヤシ酒、トウモロコシの蒸留酒、タバコなどの嗜好品、服や灯油ランタンなどの工業製品を供されている。また、農耕民から委託されて銃猟をおこない、報酬として少額の現金または服などを得ている。したがって、森林の集落に居住するアカ人と A 村の農耕民の経済的関係は 2010 年までと変わっていない。

しかし、A 村の農耕民の世代交代が進むと同時に商業伐採やウェツソでの賃労働に従事するために離村した農耕民も少なくなく、かつてのクランが形骸化し、アカ人との関係はクランとアカ人の拡大家族という集団間関係から、一人の農耕民もしくは一つの農耕民家族と個々のアカ人という個別的な関係に変わっている。この個別的な関係においても擬制的な親子関係が紐帯となっているが、農耕民の側が必要とする労働力とアカ人に供給する農作物の量が少なくなったため、また、おそらくそのためにアカ人が自分たちの焼畑耕作を拡大したため、2010 年以前と比べて農耕民の経済的優位にもとづく社会的優越性は減退して、森林集落のアカ人は農耕民からの日常的生活への介入から比較的になり、対等的な行動をとるようになっている。

2) A 村に居住するアカ人と農耕民の関係

A 村の農耕民の人口はおおよそ 130 人であるが、村内にはアカ人が少なくとも 30 人居住している。2010 年以前にも A 村に居住するアカ人はいたが、数人程度であった。これらのアカ人の大半はかつて森林集落に住んでいたが、中心となる男性が死亡したために拡大家族が離散したという事情を持つ者である。このような離散と A 村への移動の背景には、森林に居住していたアカ人のなかから伐採労働に従事したり、後述する道路沿いに小集落をつくったりするようになった者が多く、拡大家族が崩壊した後に寄寓できる森林のアカ人集落が減少したという事情があると考えられる。

かれらは A 村内で農耕民の家屋の一隅で生活し、銃猟、農作業、アブラヤシの採取、コーヒーなどの換金作物の運搬など様々な労働に従事して、代わりに農作物を得ている。かれらとかれらが寄宿する農耕民との関係は擬制的な親子関係を基調としつつも、より属人的な色彩が濃く、銃猟が得意なアカ人が優遇される一方で、インフォンドやウェツソから還流してきたアカ人とのかつての関係に頓着しない若い農耕民は単純労働に従事するアカ人に対して高圧的に接し、ときには少女に対する性暴力を含めて暴力的な行動をとる。

他方で、A 村に居住するアカ人は、森林との紐帯が薄れ、農耕民のライフスタイルに近くなったために、森林の集落に住むアカ人に対して、農耕民がアカ人に抱くのと同様の文化的優越感を持つようになっている。たとえば、かれらは、森林に「残った」アカ人は未開の民であり、自分たちは文明化されていると主張する。しかし、かれらの主張とは裏腹に農村に居住するアカ人は森林集落のアカ人よりも農耕民の恣意に従属的であり決して同等に扱われているわけではないので、かれらは地域の社会経済的な環境の変化を受けてアイデンティティ・クライシスに直面していると言える。

3) 道路沿いの小集落に居住しているアカ人と農耕民の関係

2010 年以前には見られなかったことであるが、A 村につながる道路沿いに点々とアカ人の小集落が連なっている。これらの小集落には、かつて森林集落に居住していたアカ人と中央アフリカ共和国から移動してきたアカ人が居住している。集落に居住するのは一つの拡大家族であり、A 村に居住するアカ人と同様に経済環境の変化による森林集落の減少という状況のなかで、荷運びなどの賃労働による現金収入を求めて道路沿いに移動してきた。中央アフリカ共和国から長駆移動してきたアカ人も、広域経済圏が生まれて物流と人流がさかんになったコ

ンゴ共和国北東部での現金獲得機会を得ることが移動の目的だったと考えられる。どちらの小集落でも、集落の背後でプランテンバナナやキャッサバの耕作をおこなっている。

道路沿いの小集落のアカ人と A 村の農耕民との関係は、擬制的な親子関係の紐帯のないテンポラリーな労務契約的なものであり、労役を委託できるアカ人のパートナーがいない農耕民や伐採労働者たちがその都度の必要に応じて、銃猟や換金可能なアフリカコショウの実の採取などをアカ人に委託し、報酬として少額の現金またはアルコール類などの嗜好品を渡す。

道路沿いの小集落のアカ人は地域の社会経済的環境の変化によって農耕民との持続的な社会経済的關係を失ったが、そのかわりに自律的な生計をたてていると言える。しかし、小集落に分散しているために、農耕民や伐採労働者に対して社会的に脆弱であり、不利な労務交渉を強いられたり、トラブルが生じた際に暴力を受けたりすることがある。

以上のとおり、調査地におけるアカ人と農耕民の關係は、商業伐採の浸透と広域経済圏の成立という地域の社会経済環境の急激な変化を反映して 2010 年以前の調査期と比して多様化している。今後の狩猟採集民と農耕民の關係についての研究では、同じ民族集団の同じ地域であっても、その中に生じているよりミクロな社会経済状況を読みとって關係の様態を考究する努力が必要とされるだろう。

また、今回の研究で、アカ人の一定の社会的劣位性を包含しながらも農耕民との共存を保障していた關係が一部では崩壊しており、アカ人が地域社会の中で搾取対象の最下層マイノリティとなる可能性が生じていることが明らかとなった。広域商業圏が成立した現在において、アカ人が恒常的な現金収入と集団的な意志表出の方途を持たないかぎり、市民として認知されることが難しいだけでなく、民族としての存続も危ぶまれる。しかし、集団の断片化が進んでしまったアカ人が独力でこのような方途を獲得する可能性は低いので、外部からのアドボカシーが必要とされる。アカ人、研究者、先住民権運動の国際 NGO の 3 者が協働して、農耕民や伐採労働者などの多様な關係の諸要因およびアカ人の利害や意志の精査をおこない、地域の共存關係の再構築のための具体的な方策を考究してコンゴ政府に提案することが喫緊の課題である。

(完)

引用文献

- 1) Bahuchet, S., & Guillaume, H. (1982). Aka-Farmer Relations in the Northwest Congo Basin. In E. Leacock & R. Lee (Eds.), *Politics and history in band societies* (pp. 189-211). Cambridge: Cambridge University Press.
- 2) Batini, C., Lopes, J., Behar, D. M., Calafell, F., Jorde, L. B., van der Veen, L., Comas, D. (2011). Insights into the demographic history of African Pygmies from complete mitochondrial genomes. *Mol Biol Evol*, 28(2), 1099-1110.
- 3) Bruel, G. (1910). Les populations de la moyenne Sangha: les Babinga. *Revue d'Ethnographie et de Sociologie*, 5-7.
- 4) Demesse, L. (1958). *Quest for the Babingas: the world's most primitive tribe*: Souvenir Press.
- 5) Lalouel, J. (1949). Répartition et démographie des Ba-Binga du Bas-Oubangui. *Bulletins et Mémoires de la Société d'anthropologie de Paris*, 10(1), 3-22.
- 6) Lupo, K., Ndanga, J., & Kiahtipes, C. (2014). On late Holocene population interactions in the northwestern Congo Basin: When, how and why does the ethnographic pattern begin. *Hunter-gatherers of the Congo Basin: Cultures, histories, and biology of African pygmies*. Piscataway: Transaction Press, Rutgers University, 59-84.
- 7) Lupo, K. D., Schmitt, D. N., Kiahtipes, C. A., Ndanga, J. P., Young, D. C., & Simiti, B. (2015). On Intensive Late Holocene Iron Mining and Production in the Northern Congo Basin and the Environmental Consequences Associated with Metallurgy in Central Africa. *PLoS One*, 10(7).
- 8) Regnault, M. (1911). Les Babenga (Négrilles de la Sanga). *L' Anthropologie*, 22(3), 261-288.

- 9) Takeuchi, K. (2014). Interethnic Relationships between Pygmies and Farmers. In B. S. Hewlett (Ed.), *Hunter-gatherers of the Congo Basin : cultures, histories and biology of African Pygmies* (pp. 299-320). New Brunswick: Transaction Publishers.
- 10) 竹内, 潔. (2001). 「彼はゴリラになった」－狩猟採集民アカと近隣農耕民のアンビバレントな共生関係. 市川光雄・佐藤弘明編, *森と人の共存世界* (pp. 223-253). 京都: 京都大学学術出版会.